

## 私の和歌山は秋冬春夏

教育学部大学院所属 韓国 金順姫

国を離れて、和歌山にやって来たのは去年の9月末でした。その時、韓国は秋の風が吹きはじめたころでした。日本は韓国とあまり離れてないし、時差もないぐらい近いから、季節や気温もあまり変わらないだろうと思っていた私は 秋と冬の服ばかり持ってきていたのです。日本に入国したその日も、私は秋の服でした。関空からリムジンバスで和歌山の JR 駅に着き、大学から向かいにきてくださる大学の方を待ちながら、汗でびしょびしょになったのを覚えています。9月末でも和歌山はまだ夏の気配がしました。

10月頭になって、大学のガイダンスがある日、寮に住み始めて間もない留学生たちは先輩留学生の案内で学校に行きました。小さい頃自転車に乗って以来、久しぶりの自転車でした。あまりにも久しぶりなので乗れるかどうか心配していましたが、幸いに昔の感覚を忘れずに覚えていて、ほっとしました。ところが、ほっとするのも束の間で、先輩留学生のスピードに合わせて走るのがものすごく大変でした。走っても走っても学校が見えないから、先輩の留学生に「まだですか？」って聞いたら、「まだ半分も来てないよ」って絶望的な答えが返ってきました。今考えるとそれはお城の辺りでした。確かに半分も走ってないところです。また元気を出して、一生懸命に自転車を漕いで、やっと橋に至った時、もう一回聞きました。「学校はまだですか？」先輩は橋の向こうにある山を指します。「あそこ、見える？あそこ山の上に建物あるよね？あそこだよ！」そんな！もう無理だと思いました。だって、山の上にある建物はまるで蟻のように小さく見えます。「もうこんなに疲れたのに、あそこまでどうやって行くの？」って思いました。休んでから一人で行く自信もなかったので、なんとか皆と頑張って学校には辿りつきましたが、その時はもう自転車を漕ぎ出して、一時間も過ぎたころでした。でもそこで私たちを待っていたのは急傾斜の裏坂でした。裏坂を登り始めると少しずつ口数がなくなります。学校に行った初日は山全体に私の息切れがこだまして、自分の耳に息切れしか聞こえなかったのです。山登り20分でやっと学校の運動場が見えてきます。その時、私の目に入ってきた学校はまるで砂漠で見付けたオアシスのようなものでした。

寮から学校までの自転車で走るその道にすこしずつなれてきた頃、いつも通り過ぎていた和歌山城の樹木の葉っぱが赤と黄色に染まってきたのに気がつきました。「本当に綺麗～」と思いながら、自分も知らずに自転車を止めて、カメラのシャッターを押していました。それまで自転車を漕ぐのに精一杯で、周りの景色に全然気がつかなかった私は、少しずつ周りの景色を楽しむようになりました。

登校する学生たちは殆ど自転車で、その中、小さい子は皆ヘルメットを被っています。会社に出勤する会社員も OL さんも自転車です。それぞれ背広で、スカートで自転車に乗っています。こういう風景はあまり自転車に乗らない韓国ではめったに見れない光景です。そう思っている内にまだ自転車が苦手な私を追い越しては、その背中が遠のいていきます。すごい数の自転車の行列なのに、みんな上手に走っています。私にはまだその行列がすこし怖いけど、一年後はみんなのように上手に早く乗れるのをそっと願っていたものです。

和歌山城の樹木も学校の裏坂道の木たちも一日一日見違えるように綺麗に染まっていくのを楽しんでいる内に落ち葉も増えていきます。落ち葉が増えてきた頃もお城沿いの道を走るのがすごくロマンチックでした。登校中は急いでいたので、帰り道に写真を撮ろうと思っていた私はお城を通る時、呆気にとられました。落ち葉が殆どなくなっていたのです。日本に来て、町がすごく綺麗で、ゴミ一つ見えないところに関心していた私でしたが、

この時ばかりは落ち葉をそのまま、もうちょっと放って置いていてもいいのにと思いました。この頃になると最初は大変だった北島橋も吹いてくる風が心地よいのです。

その風がすこしずつ冷たくなっていく頃、みかん狩りのイベントに参加しました。韓国ではみかんと言えば、一番南の島、濟州島ぐらいなので、大邱の出身だった私はみかんの木を見たこともなく、みかん狩りの体験ができると聞いた時、是非参加したいと思いました。有田の山に階段式で広がっているみかん畑を見るだけで、盛り上がりました。採ったみかんをその場で食べた時は、今まで味わったことのない甘さに関心しました。和歌山はみかんで有名だと小耳に挟んでいたのが実感できる瞬間だったのです。

みかん狩りの時、みかんの味に魅了され、和歌山での冬はみかんと過ごしました。みかんの産地らしく、和歌山の冬はそれほど寒くなかったです。雪も降ってなかったし、厚いオーバーも要りませんでした。北島橋の北風はすこし肌寒かったけど、それほど厳しくない寒さだったので、自転車ですぐに学校に通う私には幸いでした。ところが雪も降らないし、氷点下以下には下らない和歌山で、私が一番寒さを感じたところが部屋の中でした。韓国のオンドル文化に慣れてきた私は部屋の中の寒さにまったく慣れておらず、暫くの間は苦労したものです。部屋の中ではムートンスリッパが必要で、寝る時も靴下を履いたまま寝ていたこと、今は思い出ではありますが、当時はなかなか大変なことでした。ところが今振り返って考えて見ると、和歌山での冬を風邪も引かずに過ごせたのは部屋の中と外の温度があまり変わらなかったためかもしれません。

冬がすぎて、新学期が始まる4月になると和歌山はピンク色に染まります。あっちこっちが桜の花で恋しい色に染まるのです。学校に向かう途中にあるお城はいつも以上に綺麗に感じます。桜の美しさに気が取られ、何十分もぼうとしていたものです。お城だけではなく、和歌山市内のあっちこちで桜の花見ができました。和歌浦や紀三井寺や町の中の色んな公園など。夜桜を見に行った夜のお城は普段の何十倍の人々で込んでいました。まるで祭りのようでした。その夜の活気が桜をもっと美しくしていたのです。その夜見た和歌山城の夜桜はこれからの私に桜の代表イメージになるでしょう。

桜の木が緑に変わった頃、海南市のある山の谷間に蛍を見に行きました。蛍、名前は聞いたことがあっても、実際見たことがなかったので、蛍が見れるんだと聞いた時は、蛍って本当にいるの?!と不思議に思いました。今までは蛍というのは大昔の昆虫で、童話の中に出てくるものだと思っていたからです。海南市の町から20~30分山道を走って辿りついた谷間にはキラキラ光っているものがいっぱいありました。その光が全部蛍だったので。車の光を消すともっとキラキラと飛んでいます。蛍を夢中に見ていると市内よりあまり離れてないこういうところで蛍が見れる和歌山の人々は本当に恵まれているんだと、韓国もまた蛍が見えるようになったらいいなと思いました。蛍を見てきて感動してあまり経ってない7月のある日、朝早くからものすごい音に目が覚めました。どこか工事でもしているのかなと思って時計を見たら、時計の針は4時半を指しています。こんな早い時間に何の音だろうと不思議に思っていたら、それはセミの鳴き声でした。セミの鳴き声で目が覚めるなんて初めてのことでした。その鳴き声があまりにも大きかったので、寮から出て、セミを探してみました。本当に大きいセミたちが寮の周りの木に所狭しと付いています。そんな多い数のセミを一遍に見たのも、そんな大きいセミを見たのも初めてのことです。朝4時半頃から午前10時すぎまで、泣き続けるセミの鳴き声に慣れるまで大分時間は掛かりましたが、セミの鳴き声が聞こえて、蛍も見れる和歌山は自然に恵まれている素敵なお城だと思えます。

最初和歌山に来た時は学校と寮が遠いのが大変で、文句ばかり言っていました。ところが気持ちよい晴れの日も、土砂降りの雨の日も、強すぎて前に進めないほどの風の日も走

り続けている内に和歌山が大好きになりました。

帰国を目の前にしている今は、和歌山のあっちこっちがもう懐かしいです。いつも半額弁当を買いに通っていたメッサも、四季ごとに衣替えをしていたお城も、自転車で大変だった北島橋も、学校の裏坂も、留学生の心の拠り所であった国際交流センターも、学校から眺める市内の町並みも…全部が懐かしいです。自分の頭にすべてを刻み込むようにじっとカメラのシャッターを押しています。大好きになった和歌山を離れるのがこんな緑の季節で良かったなと思いつつながら…。

